

特殊学級入級検討児に関する研究(3)

——学校生活を中心に——

浅野 房雄*・斉藤 義夫**・井田 範美

特殊学級編成のために個別知能検査を実施した児童に対し、学校あてに調査を実施した。これら児童の学業成績は全般的に低く、特に算・国の両教科がIQ 85以下で極端に低かった。性格行動の面では根気強さや自主性の得点が低く、未熟さ、消極的、孤立的傾向はIQ 85以下で一層強かった。さらに、非社会的問題行動をもつ比率も高く、IQが低い程その傾向が強かった。また、集団参加能力や作業能力の得点も低かった。以上特殊学級入級検討児には、単に学業遅滞があるだけでなく、学校生活への適応性にも問題があり、家庭環境などをも含めての多面的・総合的な入級判別の必要かつ重要性を再確認することが出来た。また、境界線児は軽度精神遅滞児との間に家庭環境や学校生活に目立った差が見られず、ともに学業遅滞がある事実に触れ、両者の区分はIQに頼らざるを得ないことが判った。それだけに境界線児の教育措置基準を明確にし、その教育体制を整備すべきと考える。

第1報¹⁾では特殊学級入級検討児に対して、入級判別の資料とするために実施した個別知能検査の結果について報告した。続いて、第2報²⁾ではこれら特殊学級入級検討児について学校あてに調査を実施し、その項目のうち家庭環境の諸特質について考察を加えた。

今回は第3報として、学業成績や性格行動上の特徴などを中心にその結果について述べ、それらをIQ区分別に分析し、知的レベル(IQ)と学校生活状況との関係について理解を深め、これら特殊学級入級検討児の入級判別に関わる事項について考察を試みることにする。

なお、調査項目および調査方法(目的・対象児・方法および時期)については第2報²⁾で報告したものによるのでここでは省略する。

1. 結果と考察

1) 学業成績(表1, 表2, 表3, 図1)

教科学習についての五段階評定(指導要録の形式による)について、特殊学級入級検討時(小学2年または3年)の結果を教科別、IQ区分別にまとめたのが表1である。

全教科の平均は1.70で、学業成績の評定は明らかに低い。これをまず教科別に見ると、算数(1.36)、

国語(1.38)が特に低く、これらに比べると、体育(2.32)、図工(2.03)は高い。

ここで、知的教科(国, 社, 算, 理)と技能的教科(音, 図, 体)とに分け、その比較を試みたのが表2である。これを見ると、知的教科の評定は技能的教科のそれに比べて明らかに低く、差の検定($t = 2.96$, $df = 293$, $P < 0.01$)でも1%水準で有意である。従って、特殊学級入級検討児の学業成績は全般に低く、知的教科とりわけ算数、国語の成績が特に劣るといえる。

次に学業成績をIQ区分別に比較してみると、全教科の平均評定点はIQ区分が高くなるにつれて上昇している(図1)。IQ区分間の差の検定では、IQ 50~75とIQ 76~85区分間にも5%水準で有意差($t = 2.05$, $df = 141$, $P < 0.05$)がみられた。つまり、軽度精神遅滞児(以下ここでは、IQ区分間の比較を試みるためにIQのみの分類によって、軽度精神遅滞[IQ 50~75], 境界線[IQ 76~85], 正常[IQ 86~95]と区分する)と境界線児の間には学業成績に差があるといえる。さらに、これを教科別に見ると、国語と算数はIQ 85を境に、他の教科はIQ 75を境にそれぞれ1%~5%の水準で有意差がみられた。つまり知的教科においては、軽度精神遅滞児と境界線児の間には成績に差はなく、境界線児と正常児の間には明らかに差があり、境界線以下の区分では知的教科の成績は一段と低

* 土浦児童相談所

** 前心身障害学系

表1 学 業 成 績

平均IQ 教科・標準 偏	IQ区分	49以下	50~75	76~85	86~95	96~105	106以上	計
国語	M	1.33	1.15	1.29	1.50	1.50	1.69	1.38
	S D	0.58	0.36	0.46	0.57	0.55	0.79	0.53
社会	M	1.00	1.16	1.43	1.51	1.57	1.69	1.43
	S D	0.	0.42	0.58	0.55	0.54	0.70	0.56
算数	M	1.33	1.16	1.23	1.40	1.54	1.94	1.36
	S D	0.58	0.37	0.42	0.49	0.50	0.93	0.52
理科	M	1.00	1.13	1.32	1.50	1.59	1.88	1.41
	S D	0.	0.34	0.54	0.55	0.58	0.89	0.57
音楽	M	1.33	1.66	1.93	2.09	2.02	2.06	1.94
	S D	0.58	0.55	0.57	0.59	0.49	0.44	0.57
図工	M	1.33	1.80	2.03	2.19	2.07	2.06	2.03
	S D	0.58	0.56	0.60	0.56	0.49	0.77	0.59
体育	M	1.33	1.95	2.36	2.44	2.59	2.25	2.32
	S D	0.58	0.62	0.70	0.64	0.78	0.86	0.72
計	M	1.24	1.43	1.66	1.80	1.84	1.94	1.70
	S D	0.44	0.57	0.69	0.69	0.68	0.79	0.69

表2 学業成績 (知的教科-技能的教科)

平均IQ 教科・標準 偏	IQ区分	49以下	50~75	76~85	86~95	96~105	106以上	計
知的教科 (国・社 算・理)	M	1.17	1.15	1.32	1.48	1.55	1.80	1.39
	S D	0.39	0.37	0.51	0.54	0.54	0.82	0.55
技能的教科 (音・図 体)	M	1.33	1.8	2.11	2.24	2.22	2.13	2.10
	S D	0.5	0.59	0.65	0.61	0.65	0.70	0.65
t 検 定 (知的 技能的) 教科 教科		t= 0.64 df= 2 N. S	t= 2.34 df= 54 P<0.05	t= 3.56 df= 86 P<0.01	t= 2.35 df= 85 P<0.05	t= 0.27 df= 45 N. S	t= 1.76 df= 15 N. S	t= 2.96 df= 293 P<0.01

表3 早生まれ・遅生まれ別学業成績(知一技)

IQ区分 教科別			50~75	76~85	86~95	96~105	106以上
知的 教科	早	M	1.16	1.25	1.51	1.56	1.75
		S D	0.36	0.47	0.52	0.5	0.78
	遅	M	1.15	1.35	1.44	1.54	1.83
		S D	0.37	0.53	0.54	0.57	0.83
技能の 教科	早	M	1.75	2.05	2.26	2.26	2.28
		S D	0.56	0.61	0.56	0.58	0.73
	遅	M	1.82	2.13	2.22	2.2	2.03
		S D	0.59	0.68	0.66	0.69	0.66
t検定(早遅)	知教 的科	t = 0.09 df = 53 N. S	t = 0.85 df = 78 N. S	t = 0.62 df = 81 N. S	t = 0.12 df = 44 N. S	t = 0.18 df = 14 N. S	
	技教 能的科	t = 0.40 df = 53 N. S	t = 0.53 df = 78 N. S	t = 0.30 df = 81 N. S	t = 0.30 df = 44 N. S	t = 0.66 df = 14 N. S	

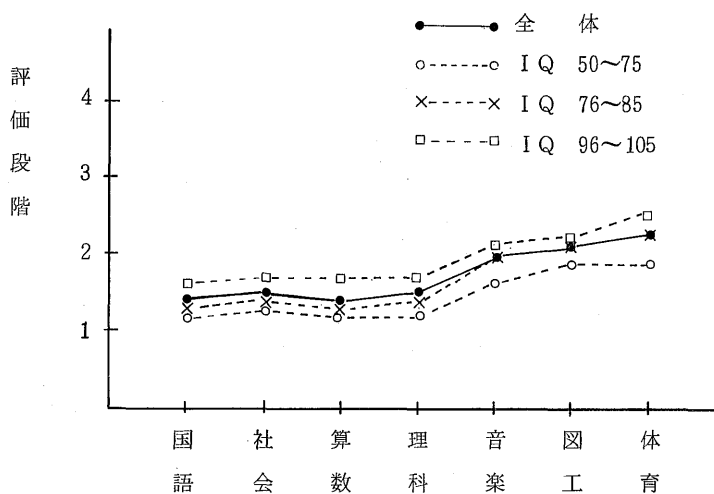


図1. 教科別学業成績

い。一方、非知的教科とも呼ばれる技能的教科については軽度精神遅滞児と境界線児との間に差がみられ、境界線児の技能的教科の成績は軽度精神遅滞児のそれよりは良い。ところで、国語と算数の両教科については、IQ 96 以下の区分では算数より国語の評定点が高く、IQ 96 以上の区分ではそれが逆転して算数の評定点の方が高くなっている。また、技能的教科についてはIQ 86 以上の区分では評定点がむしろ低下しており、特に体育はIQ 106 以上の区分ではかなり低くなっている。従って、高IQ区分においては国語の評定点の伸びが小さいこと、それに技能的教科の評定点が低いことが特徴的である。

知的教科と技能的教科の比較では、表2のとおりIQ 50~95の間では両教科間に1%~5%の水準で有意差がみられるが、IQ 96 以上の区分では有意差はみられない。これは低IQ区分では知的教科の評定点が一段と低いために技能的教科との差が大きく、一方高IQ区分では知的教科の評定点が漸増しているのに対して、技能的教科の評定点が逆に減少し、両教科間の差が小さくなっているためである。

ところで、特殊学級入級検討児は普通学級での学習について行けない児童であるので、学業成績の評定が低いことは当然であるが、知的教科——特に算数と国語——の成績が劣ることが確かめられた。一方、技能的教科——特に体育と図工——は平均以下の評定点ではあるが、知的教科に比べれば成績は良いといえる。

IQと学業成績は正の相関があるといわれるが、本調査でもIQ区分が高くなるにつれて学業成績の評定も上昇しており、特殊学級入級検討児の場合にも、IQのレベルと学業成績との間に関連性を認めることができる。特に軽度精神遅滞児と境界線児の間には学業成績に有意な差があり、軽度精神遅滞児の学業遅滞は一段と著しい。だが、境界線児にとっては抽象的・論理的思考力などを要求される算数・国語の両教科を理解し習得していくには、既に小学低学年の時期から知的な面で力不足があり、軽度精神遅滞児と同様に算数と国語の成績が一段と劣っている。

ところで、国語的能力や技能的能力の弱さが学業遅滞の原因の一つになっているのか、あるいは学業遅滞を起させる何らかの要因がこのような特徴を示すのかは断言し得ないが、高IQ区分のいわゆる学業不振児と呼べる児童は概して国語の成績が悪く、かつ技能的教科の不成績が特徴的である。

なお、早生まれ児童（誕生日が1月から3月までの児童）の学業成績を見ると（表3）、知的教科および技能的教科ともに早生まれ児童と遅生まれ児童（誕生日が4月から12月までの児童）との間に有意差はみられなかった。ただ、IQ 85を境にそれ以下の区分では、遅生まれ児童の方が評定点が良く、それ以上の区分では早生まれ児童の評定点が良くなる傾向にあり、早生まれの上に知的能力の弱さ（IQ 85以下）が加わると学習の理解・習得には一層の困難さが伴うと考えられる。

2) 行動および性格の記録（表4）

行動および性格についてはA、B、Cの三段階評定（指導要録の形式による）に、それぞれ3、2、1を付点し、特殊学級入級検討時（小学2年または3年）の結果についてまとめたのが表4である。

まず全体を見ると、根気強さ(1.64)と自主性(1.69)の得点が低く、これらに比べて礼儀(1.97)、公正さ(1.93)、公共心(1.93)の得点はやや高い。これらをIQ区分別に見ると、各区分間に有意差（t検定）はみられないが、IQ 95までの区分ではIQの上昇とともに得点も漸増し、IQ 96以上の区分では逆に減少している。

次に、項目別に各IQ区分間の差の検定（t検定）をしてみると、有意差（5%水準）がみられたのは情緒の安定（IQ 86~95とIQ 96~105の間：t = 2.05, df = 130, P < 0.005）のみである。情緒の安

表4 行動及び性格の記録

IQ区分 項目		49以下	50~75	76~85	86~95	96~105	106以上	計
健康安全の 習 慣	M	1.67	1.84	1.69	1.81	1.87	1.69	1.78
	SD	0.58	0.37	0.47	0.45	0.34	0.48	0.43
礼 儀	M	1.67	1.98	1.98	2.00	1.96	1.88	1.97
	SD	0.58	0.24	0.26	0.15	0.30	0.34	0.25
自 主 性	M	1.33	1.58	1.72	1.72	1.76	1.63	1.69
	SD	0.58	0.50	0.48	0.48	0.43	0.50	0.48
責 任 感	M	1.67	1.95	1.86	1.86	1.87	1.75	1.87
	SD	0.58	0.30	0.38	0.35	0.34	0.45	0.36
根 気 強 さ	M	1.67	1.60	1.69	1.66	1.57	1.50	1.64
	SD	0.58	0.49	0.51	0.50	0.50	0.52	0.50
創 意 工 夫	M	1.67	1.66	1.78	1.76	1.85	2.00	1.77
	SD	0.58	0.48	0.42	0.43	0.36	0.	0.42
情緒の安定	M	2.00	1.78	1.81	1.91	1.76	1.81	1.83
	SD	0.	0.46	0.40	0.33	0.43	0.40	0.40
協 力 性	M	1.67	1.80	1.90	1.94	1.98	1.75	1.89
	SD	0.58	0.40	0.34	0.32	0.39	0.45	0.37
公 正 さ	M	1.67	1.89	1.95	1.97	1.96	1.75	1.93
	SD	0.58	0.32	0.26	0.19	0.21	0.45	0.27
公 共 心	M	1.67	1.87	1.98	1.95	1.91	1.81	1.93
	SD	0.58	0.39	0.15	0.21	0.29	0.40	0.27
計	M	1.67	1.79	1.84	1.86	1.85	1.76	1.83
	SD	0.48	0.42	0.39	0.37	0.38	0.43	0.40

定については、I Q 95 を境にそれ以上の区分で安定度が低減している。また、有意差はみられないが、創意工夫の項目を除いては I Q 96 あるいは I Q 106 を境に得点が減少している。つまり、高 I Q 区分では行動および性格上に問題をもつ児童がむしろ多いといえる。

特殊学級入級検討児は学校生活場面において根気強さや自主性に欠け、学習に意欲的に取り組む態度が乏しく、さらに高 I Q 区分においては行動および性格全般に好ましい傾向が減り、特に情緒の不安定さが目立つ。そして、これら性格行動上の問題は学業遅滞の原因の一つでもあり、結果でもあったと考えられる。

なお、行動および性格に関しては、軽度精神遅滞児と境界線児、それに正常児との間に有意な差はみられなかった。

3) 性格行動の特徴 (図 2)

さらに性格行動の特徴を把握するため、semantic-differential 法により 15 の尺度について評価を求

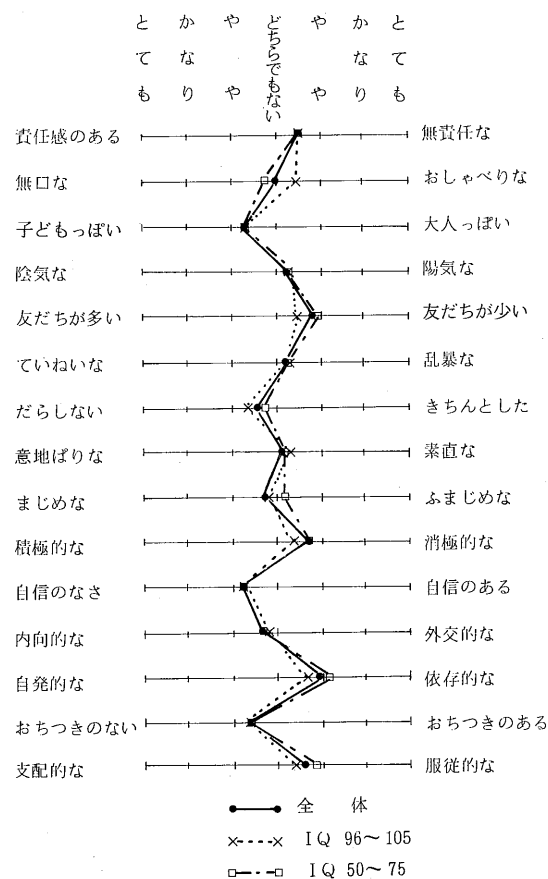


図 2. 性格行動の特徴

めた結果が図 2 である。

まず、全体のプロフィールから「子どもっぽい」「友だちが少ない」「だらしない」「消極的な」「自信のなさ」「依存的な」「おちつきのない」「服従的な」などの諸特徴が見い出せる。一方、「無口な」「陰気な」「意地ばりな」「まじめな」「内向的な」などの尺度は中庸である。

次に、これらを I Q 区分別に比較してみる。I Q 75 を境に低 I Q 区分と高 I Q 区分に二分し、差の検定 (X^2 検定) をしてみると、有意差のみられた尺度はないが、I Q 85 を境にすると「友だちが多い——友だちが少ない」($X^2=7.89$, $df=1$, $P<0.01$), 「子どもっぽい——大人っぽい」($X^2=6.97$, $df=1$, $P<0.01$)「積極的——消極的」($X^2=8.54$, $df=1$, $P<0.01$)の三尺度については、1%水準で有意差がみられた。つまり、I Q 85 以下では「友だちが少ない」「子どもっぽい」「消極的」な傾向が強いといえる。

特殊学級入級検討児の性格行動の特徴は、未熟で依存的であり、しかも消極的、孤立的で、情緒の不安定さも目立つ。特に境界線以下のレベルでは、未熟さ、消極的、孤立的傾向がさらに強く、学級集団にとけ込めない児童が多いと考えられる。つまり、境界線以下の児童は知的面での力不足があるために、対等の友人関係が維持できず、かつ集団内での成功体験も乏しく自信をもてず、学級集団内での孤立化が助長されていると考えられる。

なお、これら性格行動の特徴については、軽度精神遅滞児と境界線児との間には有意な差はなく、境界線児と正常児の間にはその特徴に差がみられ、境界線以下の児童には未熟さ、消極的、孤立的傾向が強い。

4) 問題行動 (表 5)

問題行動がある場合にはすべて記入する方法により、行動上の問題について評価を求めた結果が表 5 である。

これによると、問題行動を有しない児童は全体の 40.5% であり、半数以上の児童は行動上に何らかの問題を持っている。田中教育研究所の調査(1959 年)によると、小学生一般の問題行動の出現率は 29.4% であり、この数値に比べると、本調査の出現率はかなり高いといえる。これを I Q 区分別に見ると、I Q 区分が高くなるにつれて、「問題行動なし」の比率も 0% から 64.9% へと上昇しており、知的レベルが低いほど行動上に問題を持つ児童が多い。一方、I

表5 問題行動

IQ区分 問題行動	IQ区分						計
	49以下	50～75	76～85	86～95	96～105	106以上	
落 着 き な し	2 (66.7)	17 (30.9)	31 (39.7)	26 (31.7)	9 (24.3)	6 (42.9)	91 (33.8)
多 動	1 (33.3)	7 (12.7)	1 (1.3)	3 (3.7)	2 (5.4)	0 (0.)	14 (5.2)
盗 み	0 (0.)	4 (7.3)	3 (3.8)	4 (4.9)	1 (2.7)	0 (0.)	12 (4.5)
乱 暴	0 (0.)	5 (9.1)	4 (5.1)	4 (4.9)	4 (10.8)	0 (0.)	17 (6.3)
登 校 拒 否	0 (0.)	1 (1.8)	0 (0.)	0 (0.)	2 (5.4)	0 (0.)	3 (1.1)
孤 立	1 (33.3)	14 (25.5)	10 (12.8)	16 (19.5)	3 (8.1)	0 (0.)	44 (16.4)
緘 黙 ・ 無 口	2 (66.7)	8 (14.5)	7 (9.0)	6 (7.3)	1 (2.7)	1 (7.1)	25 (9.3)
吃 音 ・ 発 音 異 常	0 (0.)	5 (9.1)	3 (3.8)	0 (0.)	0 (0.)	0 (0.)	8 (3.0)
爪かみ・指しゃぶり	0 (0.)	0 (0.)	4 (5.1)	3 (3.7)	0 (0.)	0 (0.)	7 (2.6)
そ の 他	0 (0.)	2 (3.6)	2 (2.6)	4 (4.9)	2 (5.4)	1 (7.1)	11 (4.1)
な し	0 (0.)	13 (23.6)	28 (35.9)	37 (45.1)	24 (64.9)	7 (50.0)	109 (40.5)

() 内数字は出現率

Q 106 以上の高IQ区分では「問題行動なし」の比率が下り、逆に問題行動を持つ児童が増えている。

次に問題別では、「落ち着きなし」(33.8%)が高率であり、これをIQ区分別に比較してみると、IQ 106 以上の区分で42.9%と一段と高い。つまり、特殊学級入級検討児の中には落ち着きに欠ける児童が多く、特に高IQ児にそれが目立つ。続いて、「孤立」(16.4%)と「緘黙・無口」(9.3%)の比率が高い。緘黙の出現率は東京都の調査(1970年)結果では0.47%であるが、本調査では無口な児童も含めての数

値ではあるが、9.3%とかなり高い。これをIQ区分別に見ると、低IQ区分ほど「緘黙・無口」の比率が高く、特にIQ 50～75の区分で高率となっている。つまり、知的レベルが低いほど学級集団の中で、孤立傾向と寡言傾向が強く出ているといえる。ところで、「盗み」(4.5%)や「乱暴」(6.3%)の出現率は、「孤立」「緘黙・無口」などの非社会的問題行動のそれに比べて低い。また、「爪かみ」「指しゃぶり」などの神経性習癖と呼ばれる行動の出現率(2.6%)も低い。

特殊学級入級検討児の中には問題行動を持つ児童が多く、この問題行動も非社会的問題行動が多く、I Q区分が低いほどその傾向が強い。やはり、性格行動の特徴のところでも指摘したように、特殊学級入級検討児の多くは、知的面の力不足が一次的あるいは二次的原因となって生じているであろう不適応感を抱きながら、不安定な心理状態で学校生活を送っており、それが非社会的問題行動の出現へと発展していると考えられる。学業遅滞児でもある特殊学級入級検討児が、小学2年～3年生の低学年のうちから、既に行動上に問題性を出現させているのは深刻な問題である。

なお、軽度精神遅滞児は境界線児に比べて問題行動を持つ児童が多く、特に孤立傾向が強い。一方、境界線児と正常児との間には目立った差はみられなかった。

5) 社会生活能力(表6)

体位、健康の項目を含めて社会生活能力のいくつかの側面についてA、B、Cの三段階評定を求め、それぞれに3、2、1を付点しまとめたのが表6である。

項目別に見ると、「作業」(1.73)、「身辺処理」(1.75)、「集団参加」(1.75)の各項目の得点に比べて、「健康」(2.19)、「体位」(1.90)の得点は高い。

次に、全項目の平均をI Q区分別に見ると、各区分間に有意差(t検定)はみられないが、I Q区分が高くなるにつれて得点も上昇していく傾向にある。さらに、各項目別にI Q区分間の比較をしてみると、有意差はみられないが、「身辺処理」「作業」「運動」についてはI Q 96以上の区分で得点が低下しており、高I Q区分ではこれらの能力がむしろ劣っている。ただし、集団参加の得点はI Q区分の上昇とともに漸増しており、知的面の力不足が集団参加能力を低くしていると考えてよいと思われる。

特殊学級入級検討児は社会生活能力が既して低く、特に集団参加能力と作業能力の低さが目立つ。しかし、身体面については目立って見劣りするところはない。

なお、社会生活能力の面については、軽度精神遅滞児と境界線児との間に目立った差はみられなかった。

6) 身体的ハンディキャップ(表7)

表6 社会生活能力

項目	平均IQ区分 標準偏差	49以下	50～75	76～85	86～95	96～105	106以上	計
身辺処理	M	1.33	1.69	1.71	1.78	1.86	1.79	1.75
	S D	0.58	0.47	0.56	0.52	0.59	0.58	0.58
集団参加	M	1.33	1.56	1.68	1.82	1.89	2.14	1.75
	S D	0.58	0.50	0.57	0.48	0.58	0.54	0.54
作 業	M	1.00	1.67	1.70	1.82	1.72	1.79	1.73
	S D	0.	0.64	0.61	0.55	0.62	0.43	0.59
運 動	M	1.00	1.64	1.84	1.93	1.81	2.00	1.82
	S D	0.	0.65	0.67	0.62	0.58	0.68	0.65
体 位	M	3.00	1.87	1.85	1.93	1.89	1.86	1.90
	S D	0.	0.61	0.60	0.47	0.67	0.36	0.57
健 康	M	2.67	2.07	2.11	2.24	2.31	2.43	2.19
	S D	0.58	0.47	0.48	0.58	0.47	0.51	0.52
計	M	1.72	1.75	1.81	1.92	1.91	2.00	1.86
	S D	0.89	0.58	0.60	0.56	0.60	0.56	0.59

身体的ハンディキャップをもつ児童の比率は全体の11.9%であり、身体虚弱(5.9%)とてんかん(2.2%)の比率が高い。文部省調査³⁾によると、病弱・虚弱の出現率は0.49%であり、本調査の5.9%はかなりの高率と考えるとよい。これをIQ区分別に見ると、IQ 50~75 (12.7%)、IQ 76~85 (5.1%)、IQ 86~95 (2.4%)であり、IQ 50~75の区分の出現率が特に高い。また、てんかんは一般人口の出現率(0.3%)に比べて本調査の出現率は2.2%と高く、しかもIQ 50~75の区分では7.3%で一段と高い。難聴についても文部省調査の出現率(0.11%)に比べて、本調査の出現率は0.7%で高い。さらに弱視についても、文部省調査の出現率(0.08%)に比べて、本調査の出現率0.7%はやはり高い。

特殊学級入級検討児の身体的ハンディキャップについては、一般児童の出現率に比べて概して高く、身体虚弱とてんかんの出現率が特に高い。身体虚弱

表7 身体的ハンディキャップ

身体的ハンディキャップ	人 数	出現率 (%)
難 聴	2	0.7
弱 視	2	0.7
し 体 不 自 由	3	1.1
身 体 虚 弱	16	5.9
て ん か ん	6	2.2
主な病気(ぜんそく、 腎臓・心臓疾患)	6	2.2
な し	237	88.1

やてんかんなどを含めて、身体的条件が学習・行動

の面に微妙に影響を及ぼしていることは否めない。

なお、身体的ハンディキャップについては軽度精神遅滞児と境界線児との間には出現率に差があり、軽度精神遅滞児には身体的ハンディキャップを持つ児童が多い。境界線児と正常児との間には目立った差はみられなかった。

7) 宿題への態度(表8)

全体の65.2%が宿題をやってこない児童である。これをIQ区分別に見ると、IQ 96~105の区分(58.3%)でやや低いが、他の区分との間に有意差はみられず($X^2=0.98$, $df=1$, N.S.), IQ区分の高低にかかわらず、特殊学級入級検討児には宿題をやってこない児童が多い。

宿題への態度は低学年のうちは家庭の教育への関心度などとも関係するが、特殊学級入級検討児はIQの高低にかかわらず学習意欲に乏しく、家庭での学習習慣も身につけていないと考えられる。また、この学習意欲の乏しさは、知的能力の力不足による教科の学習困難さや成功・成就体験の少なさなどによっても生じていると考えられる。

なお、宿題への態度については、軽度精神遅滞児と境界線児との間に目立った差はみられなかった。

8) 学業遅滞の原因(表9、図3)

担任教師により学業遅滞の原因を順に3つだけ選択してもらった結果(表10、図3)によると、第1順位では「知的能力が低いため」(58.6%)、第2順位では「基礎学力が低いため」(46.3%)、第3順位では「学習習慣がないため」(33.3%)がそれぞれ第1位に選択されている。ところで、第1順位に選択された項目についてその選択順位を見ると、第1位の「知的能力が低いため」(58.6%)に続いて、「基礎学力なし」(24.6%)、「家庭環境が悪い」(5.6%)となっており、「知的能力が低いため」以外の項目の選択率はかなり低い。

表8 宿 題 へ の 態 度

IQ区分 態 度	49以下	50~75	76~85	86~95	96~105	106以上	計
必ずやってくる	0 (0%)	0 (0%)	5 (6.4%)	5 (6.1%)	0 (0%)	1 (7.1%)	11 (4.1%)
大体やってくる	0 (0.)	16 (29.6)	19 (24.4)	24 (29.3)	14 (38.9)	4 (28.6)	77 (28.8)
やってこない時多し	1 (3.3)	23 (42.6)	39 (50.0)	41 (50.0)	18 (50.0)	9 (64.3)	131 (49.1)
全くやってこない	2 (6.7)	14 (25.9)	13 (16.7)	11 (13.4)	3 (8.3)	0 (0.)	43 (16.1)
家族にやってもらって くる	0 (0.)	1 (1.9)	2 (2.6)	1 (1.2)	1 (2.8)	0 (0.)	5 (1.9)

表9 学 業 遅 滞 の 原 因

原因	IQ区分 順位	49以下	50～75	76～85	86～95	96～105	106以上	計
知的能力が低い	1	3(100.0%)	48(87.3%)	56(71.8%)	32(39.0%)	15(41.7%)	3(21.4%)	157(58.6%)
	2	0(0.)	4(7.3)	8(10.3)	24(29.3)	7(19.4)	0(0.4)	43(16.0)
	3	0(0.)	1(1.8)	5(6.4)	13(16.0)	6(16.7)	3(21.4)	28(10.5)
基礎学力なし	1	0(0.)	1(1.8)	14(17.9)	30(36.6)	15(41.7)	6(42.9)	66(24.6)
	2	2(66.7)	31(56.4)	43(55.1)	29(35.4)	13(36.1)	6(42.9)	124(46.3)
	3	1(33.3)	20(36.4)	12(15.4)	11(13.6)	2(5.6)	2(14.3)	48(18.0)
家庭環境悪い	1	0(0.)	1(1.8)	2(2.6)	7(8.5)	5(13.9)	0(0.)	15(5.6)
	2	0(0.)	7(12.7)	9(11.5)	4(4.9)	0(0.)	1(7.1)	21(7.8)
	3	0(0.)	5(9.1)	11(14.1)	9(11.1)	3(8.3)	0(0.)	28(10.5)
学習習慣なし	1	0(0.)	1(1.8)	0(0.)	3(3.7)	1(2.8)	3(21.4)	8(3.0)
	2	0(0.)	3(5.5)	2(2.6)	11(13.4)	11(30.6)	3(21.4)	30(11.2)
	3	1(33.3)	18(32.7)	26(33.3)	26(32.1)	12(33.3)	6(42.9)	89(33.3)
学習意欲なし	1	0(0.)	2(3.6)	2(2.6)	7(8.5)	0(0.)	2(14.3)	13(4.9)
	2	0(0.)	7(12.7)	13(16.7)	9(11.0)	4(11.1)	3(21.4)	36(13.4)
	3	0(0.)	8(14.5)	17(21.8)	14(17.3)	11(30.6)	3(21.4)	53(19.9)
欠席多い	1	0(0.)	0(0.)	1(1.3)	0(0.)	0(0.)	0(0.)	1(0.4)
	2	0(0.)	0(0.)	1(1.3)	1(1.2)	0(0.)	0(0.)	2(0.7)
	3	0(0.)	1(1.8)	2(2.6)	0(0.)	1(2.8)	0(0.)	4(1.5)
性格的問題	1	0(0.)	0(0.)	2(2.6)	3(3.7)	0(0.)	0(0.)	5(1.9)
	2	0(0.)	1(1.8)	1(1.3)	3(3.7)	1(2.8)	1(7.1)	7(2.6)
	3	1(33.3)	1(1.8)	3(3.8)	6(7.4)	1(2.8)	0(0.)	12(4.5)
身体的問題	1	0(0.)	2(3.6)	1(1.3)	0(0.)	0(0.)	0(0.)	3(1.1)
	2	1(33.3)	2(3.6)	1(1.3)	1(1.2)	0(0.)	0(0.)	5(1.9)
	3	0(0.)	1(1.8)	2(2.6)	2(2.5)	0(0.)	0(0.)	5(1.9)

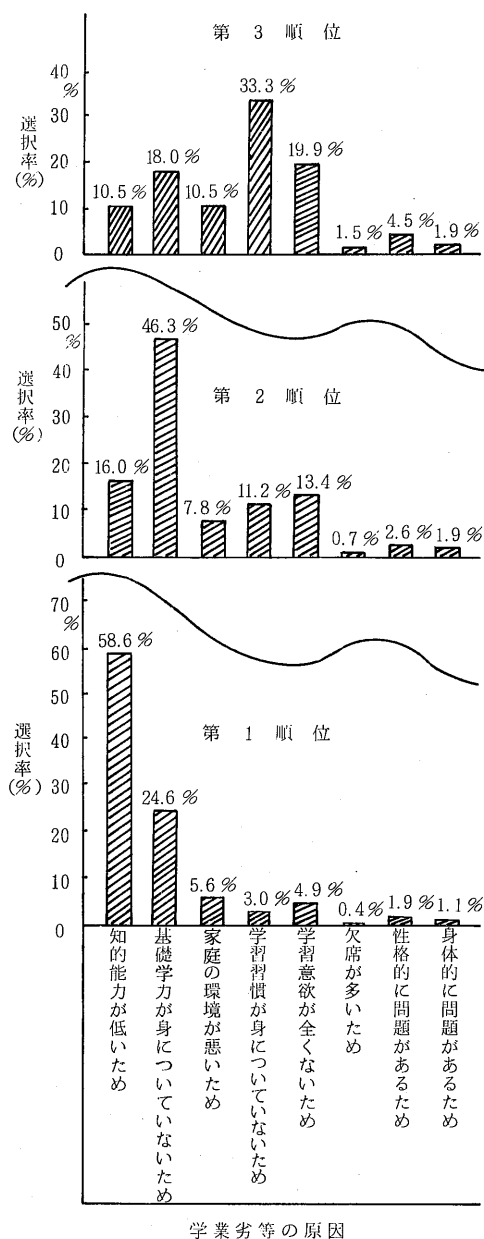


図 3. 順位別学業遅滞の原因

次に、これをIQ区分別に見ると、「知的能力が低い」との選択率はIQ 85以下の区分では71.8%～100%と高率であり、これがIQ 86以上の区分になると、21.4%～41.7%でその比率は低減している。つまり高IQ区分では「知的能力が低い」との選択率が低減する一方で、「基礎学力なし」「学習意欲なし」「学習習慣なし」などの選択率が高くなっている。

特殊学級入級検討児の学業遅滞の原因は知的能力の低さが中心で、それに基礎学力や学習習慣が身に

ついていないことなどが絡んでいると見られている。特に、境界線以下の区分では学業遅滞の原因は、知的能力の低さにあると見做されている児童が大方である。一方、高IQ区分では、学業遅滞の原因は基礎学力や学習態度、それに学習環境などのより多くの原因が絡んでいると見做されているが、なかでも基礎学力が身に付いていないためと見做されている児童が半数近く(41.7%～42.9%)を占めている。これは個人差を無視した進度の速い学習形態の中では、知的に力不足があると基礎学力を身につけ損ってしまうということを裏づける資料の一つであると思われる。ところで、知的に正常な区分(IQ 86～105)においても、半数近く(39.0%～41.7%)が学業遅滞の原因を知的能力の低さに求めている事実は、実態に即したIQの検討の必要性を訴える一資料であろう。

なお、学業遅滞の原因については、軽度精神遅滞児と境界線児の間には各順位の選択項目と選択率に目立った差はなく、ともに大方は知的能力が低いと見做されている。境界線児と正常児の間では選択順位は変わらないが選択率には差がみられ、正常児では知的能力が低いと見做されている児童が減り、多くの原因が影響し合っていると考えられている。

2. まとめと提言

われわれは、特殊学級入級検討児に関する研究——(1), (2), (3)——を通して、特殊学級入級検討児の実態をより明確にし、入級判別をより適正なものとする目的で調査結果を報告し考察を試みた。ここでは、これらの調査結果に基づいて、主に入級判別に関わる事項についてまとめ、提言をしたい。

1) 教育措置基準について

養護学校教育の義務制に関する法令・通達集⁴⁾によれば、「境界線児は原則として通常の学級において留意して指導すること」となっており、境界線児は「通常の教育課程を履習することが著しく困難でない」とされている。ところで、本研究の対象児は普通学級での学習について行けない児童であり、これらの83.2%(IQ 86以上の児童)は境界線児や学業遅滞児と呼べる児童で、これら児童の学業遅滞の原因を調べた結果では、境界線児の学業遅滞の原因は大方(71.8%)知的能力の低さに求められている。つまり、境界線級の知能(IQ)では普通学級での教科学習の理解と習得には困難があると現場の教師

は見ていようである。従って、境界線区分では、91.4%が、IQ 86以上の区分でも43.7%の児童が総合的判別の結果、特殊学級入級が望ましいと判定されている。境界線児に限っていえば、学業成績が明らかに低く、特に知的教科については軽度精神遅滞児と同様、学業成績の低さが著しく、さらに家庭環境や行動上にも問題性が絡んでいるなどの結果を見ると、現行の知能検査で算出されるIQ 76~85の区分に入る境界線児は通常教育過程の履習が困難でないといえるであろうか、疑問を抱かざるを得ない。

特殊学級入級検討児に対して個別知能検査を実施してみると、IQ 75以下の児童の数はむしろ少なく(16.8%)、新しい基準のもとでは特殊学級の定員確保の問題が一層深刻となることが予測される。その一方では、普通学級で教育される境界線児および学業遅滞児が普通学級でのお客様という存在になってしまう心配がある。従って、これら予測される問題に対して、新たな研究とともに実態に即したIQ修正の検討や教育措置基準の見なおし、それに境界線児を含めた学業遅滞児に対する教育形態や方法などについての諸対策が早急に望まれる。

2) 入級判別について

特殊学級への入級判別に関しては、知能・学業成績・社会生活能力・性格行動・身体面など児童自身の諸条件の他に家庭や地域の諸環境、それに特殊学級の内部事情なども考慮し、児童の発達・成長を保障していくという原点に立った判別を目指さなければならないし、これらの諸条件、諸環境について教育学的分野ばかりでなく、医学的・心理学的・社会学的分野などからの多面的な検討が必要なことは当然である。

さて、これまでの研究¹⁾²⁾および本研究を通して、入級判別に際して次の諸事項について配慮する必要があると思われるので指摘しておく。

- ア. 特殊学級入級検討児にはIQの高い児童が多く含まれており、学業遅滞の原因を多面的に検討する必要がある。
- イ. 特殊学級入級検討児の知能構造には、いくつかの特性が見られるので、単にIQのレベルだけでなく知能の構造的特徴を把握した上での検討が必要である。
- ウ. 特殊学級入級検討児に含まれる早生まれ児童(誕生日が1月から3月までの児童)については、学業遅滞や学習困難の原因の一つとして、

早生まれのhandicapが考えられるので、入級判別の際には早生まれという年齢不足を考慮する必要がある。

エ. 特殊学級入級検討児の家庭は社会的、経済的、文化的諸環境に恵まれない例が多いので、入級判別の際にはこれら家庭的・環境的背景を十分考慮する必要がある。

オ. 特殊学級入級検討児には学業遅滞の他に、学校での集団生活において辺縁的位置しか占められない状況にあり、そのためにたえず不適応感を抱いている心理状態にあることを考慮し対処する必要がある。

ところで、精神遅滞の基本にあるものは知的能力であり、その知的能力を測定し理解するには知能検査が現在のところ有力な武器であることには異論はなく、特殊学級への入級判別に際しても知能検査の重要性については否定することはできないと考える。そこで、特殊学級入級のための判別機能を高めて行くためには、まず知能の測定技術の向上を計るべきである。第1報¹⁾でも指摘したように、特殊学級入級検討児の知能構造の特徴なるものも見い出されており、単にIQという数値を算出するだけでなく、知能の構造までも読みとることのできる知能検査に熟達した人材を養成していく必要があろう。県が毎年開催している入級判別講習会は知能検査の理解者の養成にはなるが、果たしてそこから熟達者が何人育っているであろうか。今後の課題として、少なくとも市町村単位あるいは教育事務所単位に判別の熟達者を配置するなどの検討を訴えたい。

ところが、たとえ判別の専門家たりえても諸条件が絡み合っている状態にある児童の教育措置を決定して行くには慎重の上にも慎重であらねばならないし、少なくとも将来までも予測できる完全な判別は不可能である。この判別機能の限界や判別技術の未熟さや不備を補うというだけではなく、児童一人ひとりの好ましい教育条件をたえず整えて行くという積極的な考えからも、教育措置決定後のフォローアップが必要であると考え。校内においてはそのような検討もなされていると聞が、市町村の就学指導委員会においても、特殊学級入級児の措置の適正さを年度ごとに検討するシステムの実現を要望したい。そして、判別および教育措置の再修正をたえず可能にしておく必要があると思われる。

また、学業成績には知能の他に性格的要因、それに学習環境などの諸要因も影響を及ぼすのである

が、教科学習の理解度あるいは習得度の可能性の予測について、知能構造も加味した知的レベルの確固とした基準が現場に示されることを期待したい。IQについても、田中ビネー知能検査の結果に比べて、WISCでは高く、また早近公刊されたWISC-Rではかなり低くであるという現場での臨床経験からも、検査間のIQの解釈基準も曖昧であり、検査種に対応した基準の明確化も望みたい。

さらに、総合的判別を行う重要性は、特に知能検査に精通すればするほど感じることであるが、学業成績の他に社会生活能力や運動能力、それに家庭環境などの細かな基準なくしては、現場では、ただ知能検査の結果（IQ）だけに頼らざるを得ないのである。個々の児童の状態像を多面的にとらえる方法とその基準を明確にし、現場に提示して行くことも期待したい。例えば、児童を多面的に理解するには行動観察による日常の生活状況の把握が役立つと考えられ、教育措置に関する行動観察のポイントやチェックリストを作成し、現場に提示することなども望まれる。

3) 境界線（中間）児について

IQ区分の上から軽度精神遅滞（IQ 50～75）に連続する境界線（IQ 76～85）と呼ばれる児童の入級判別は、その概念・実態が不明確であることもあって、教育措置には難しさ（迷い）が伴うのが事実である。そのこともあって、本研究では各項目についてIQ区分間の比較をし、境界線児の実態を明らかにしようと試みた。本研究の対象児は普通学級での教育に困難さを感じている児童であり、その中で境界線区分に属する児童であるので、果たして境界線児一般を代表しているかどうかは検証の必要があると思われるが、次の特徴が明らかとなった。

ア. 境界線に属する児童は特殊学級入級検討児全体の27.3%を占め、軽度精神遅滞児（26.0%）よりその数が多い。しかも、総合的判別の結果、境界線児の大方（91.4%）は特殊学級入級が望ましくと見做されている。

イ. 境界線児の家庭環境は軽度精神遅滞児と同様、社会的・経済的・文化的諸環境に恵まれない例が多く、境界線児は知的な弱さだけでなく、好ましくない家庭環境が重なっている。

ウ. 境界線児は技能的教科においても普通児と同等にやっていける児童は少なく、知的教科においては既に小学2～3年生の低学年のうちから学習困難の状態に陥っている。

エ. 性格行動の面においては、境界線児は軽度精神遅滞児と同様、正常児に比べて「未熟さ」「消極的」「孤立的」などの特性が強く、学習場面だけでなく、集団生活の中でも辺縁的位置しか占められない状態にある。

オ. 境界線児の学業遅滞の原因は軽度精神遅滞児と同様、知的能力が低いためと見做されている。

以上の諸特徴は、軽度精神遅滞児のそれと共通するものである。間中⁵⁾が境界線児について質的差を発見することは現在の心理学ではむずかしいと指摘しているように、本研究でも境界線児と軽度精神遅滞児との間に明らかな差を検出することは出来なかった。学業成績に関しては、抽象的・論理的能力を要求される算数と国語の両教科については境界線児は軽度精神遅滞児と同様、評定がともに低いことは、両者間に知能の中心的能力に差がないのではと考えられる。知能構造上にその差があるかどうかの検索を含めて、境界線児の知的特性については今後の研究課題としたい。

なお、境界線児の教育措置については既に論及したが、軽度精神遅滞児と境界線児の間には学習面ばかりでなく家庭環境や学校生活状況に目立った差がなく、ともに学業遅滞がある事実に触れ、両者の区分はIQに頼らざるを得ないことを再確認した。それだけに、境界線児の教育措置基準を明確にし、その教育体制の整備を改めて訴えたい。

引用文献

- 1) 斉藤・浅野：学業遅滞児（特殊学級入級検討児）に関する研究(1)：心身障害学研究（筑波大学）Vol 4(1) 1980年
- 2) 浅野・斉藤：学業遅滞児（特殊学級入級検討児）に関する研究(2)：心身障害学研究（筑波大学）Vol 6-1 1982年
- 3) 文部省大臣官房調査課編：児童生徒の心身障害に関する調査報告書 1967年
- 4) 文部省初等中等教育局特殊教育課編：養護学校教育の義務制に関する法令・通達集 1979年
- 5) 間中十：あまりにも無視されて内容のないその概念：精神薄弱研究（全特連編）142 1970年 10-13

Summary

Study on Children Tested as Possible Candidates for Special Classes

—The Character of their Lives at School—

Fusao Asano, Yoshio Saitou, and Noriyoshi Ida

The purpose of this research is to investigate the character of the school life of children tested as possible candidates for special classes, analyse how this is related to IQ, and deepen overall understanding in this area. In order to achieve this aim we carried out a survey in several schools. (The contents of this survey have already been described in report No. 2, preceding this one.) The results of the survey indicated the following :

1. Children tested as possible candidates for special classes have low grades in school, especially in academic subjects.
2. These children are lacking in perseverance and spontaneity, and have little will to learn. They are also immature, dependant, negative, and tend to be isolated from the group. These tendencies are especially notable among those with IQ of less than 85.
3. Among these children are a large number who demonstrate asocial behavior. This tendency becomes stronger as IQ becomes lower.
4. These children are low in their social ability. Their lack of ability to participate in group activities and to do work projects is especially notable. There seems to be no clear relationship between this and IQ.
5. These children tend to have weak constitutions, and a number of them are epileptics. These trends are especially notable among children with IQ of 50 to 75.
6. Regardless of IQ level, a large number of these children do not do their homework.
7. The reason for the educational retardation of these children in more than half of the cases (58.6%) is seen by the teachers to be low intellectual ability.

This research has shown that children tested as possible candidates for special classes have the following special characteristics, which must be considered comprehensively from a variety of aspects in order to determine whether or not these children should be placed in special classes.

1. Some of these children have high IQ.
2. These children have a number of special characteristic intellectual traits.
3. A large number of these children were born between January and March.
4. A large number of these children come from disadvantaged homes.
5. There are a large number of these children who have personality and behavior problems in addition to the handicap of educational retardation.

Finally, there are some children who are always on the periphery, not only in study, but also in group activities in school. Those, who are called boderline children, should be given proper treatment.